

繪本拾遺信長記
三

~ 19
3564
3



門 へ 13
號 3564
卷 3



繪本拾遺信長記卷之三

目錄

本願寺評定之事

金園が松拾松

石山より鈴木重幸とる事

本願寺評定

信長攝河内國平均之事

池田勝政信長と戦ふ

小回勢を龍寺乃城と美ら

繪本拾遺信長記卷之三

早稲田 大學 図書館
昭和 34.6.3 受
藏 書

本下系の吉軍用金備奉願寺事

本下系吉郎上人を歎く

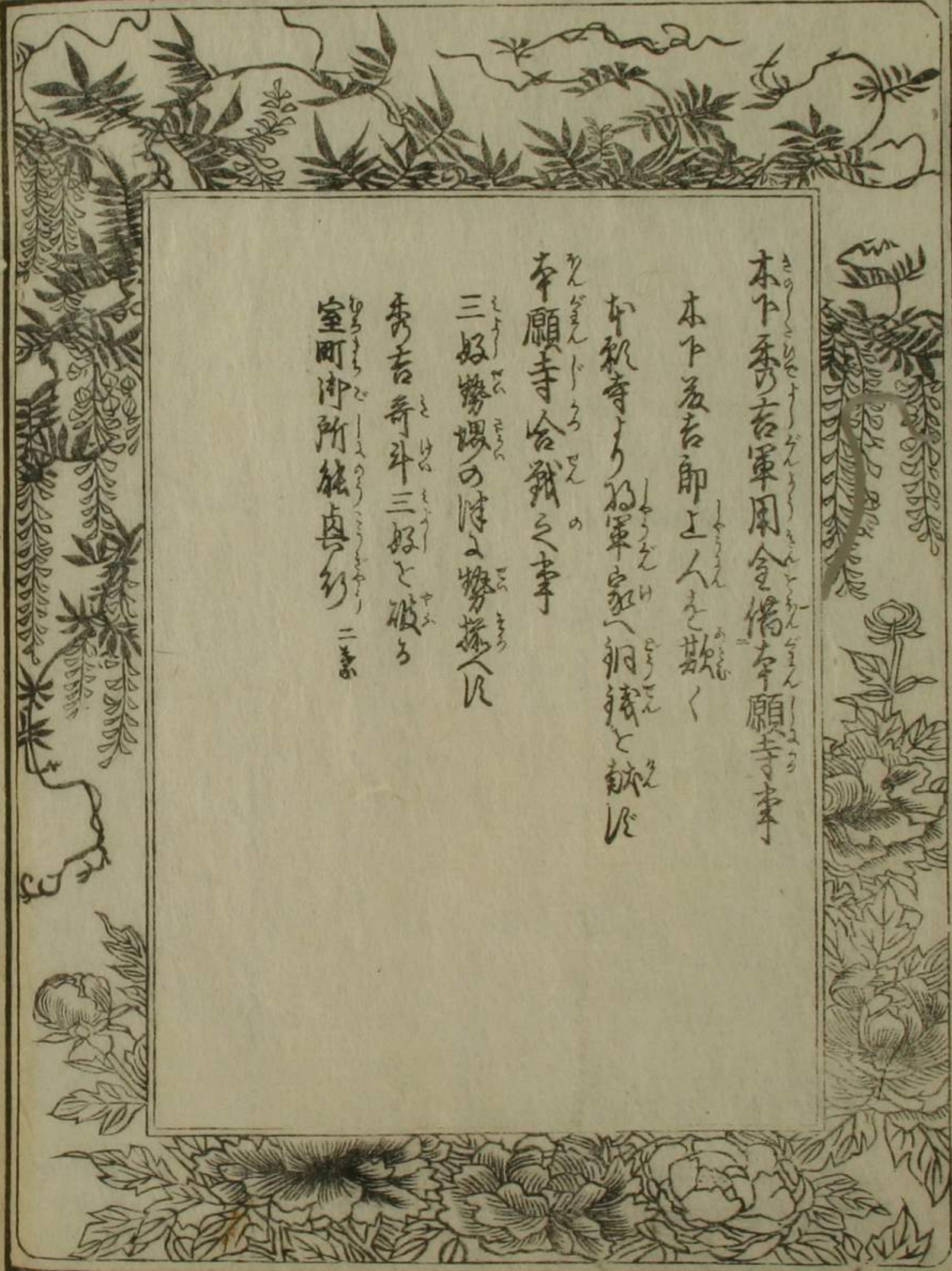
本願寺より得軍家へ銅鏡と鉄刀

奉願寺合致之事

三好勢塚の討之勢塚人

秀吉奇斗三好と破る

室町御所能貞形 二葉



繪本拾遺信長記初篇卷之三

本願寺評定之事

紀伊國海郡郡と有田郡の境は夏白山といふ所あり白夏之移
くくも藤く咲乱るより夏白山と号とくやけ不夏双の
風系ありて秋人強客の心といたましむ昔時大納言巨勢の
全園といふ名画の人ありけ不の風を懸糸を揮写せんといふ
阿まさ度等瓜房しぬまも志の風系乃ぬるふ無瓜房
捨く字凡を止むといふ他人に今も全園が等捨松とて彼
不れありといふ續後撰集外意法師の言ふ

夏白の御坂を城く足渡せば霞も中ぬ吹上の候
けこの林藤ふ鈴木源右衛門尉守孝といふ者あり其る祖は源

日本書紀卷之三



松拾
令圖



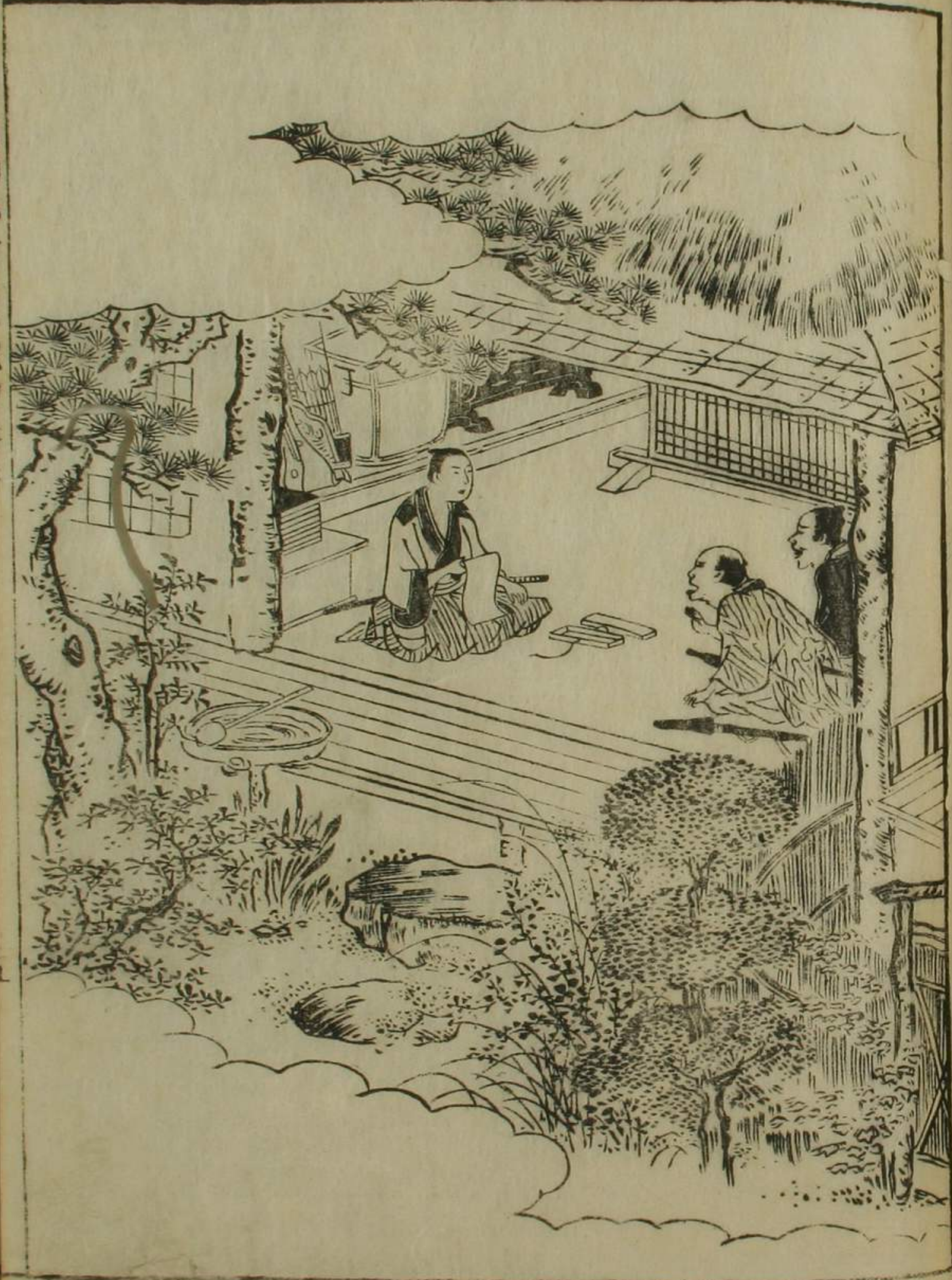
日本書紀卷之三

延尉義經の功臣珍本三郎重家北に代乃後胤珍本庶可幸
 倫が婿男なり天性智勇王仇の英才ありて胸中ニ孫星の兵
 術と養ひ子房孔明が謀略を學びて志すも若冠の時より
 名を家々と執りては後白山の幽居に雪月花と耽んで
 山々の清書と甘じ一向世々の炊ひきとて人の余り佛道の
 深理なり小心をとり先祖より密師の門系に連るる毎
 二石に指上人の獨し佛の令言とよるるびるのさきと論
 於如上人も尋常なる也と理義明らるる孤標し孫の一方
 ありては孫のいけ度急候を以て身をたけと拓き孫より
 何れやんと菴と立り石にあり席に連りて其動靜と定
 りよ本教寺の坊官家老用人と首に近圓近在の門徒未だ

の佛道難敷集り奉門にじり小廣き御堂に居余り膝とかさ
 孫はと交へ何れの議論中と息と浩て並居りけ時上人内陣に
 出させ孫の信長が口上の執きと審り物流り眼に所候と孫
 孫の何と返答せば可なりんや我文も其云べき言ふと希人
 け小門下の衆中と拓きよせ衆議のよんく返答せん今
 日の會合も及ひり人の心慮すまじとあつれい座の人々
 門徒の面くまゝ執と見合せく惜く河も出さるり山田三
 郎ちまゝの侍とて出くや多り某不肯より人も不存とせし
 とごろも罷流りけい悪業とやんば信長元來辨曲不信り大
 ねはして今度足利義昭と拵と換て孫と人と追退候
 嵩宗門と破却せんこの下心と見え抑嵩寺の智徳をのみ

國本傳長壽寺傳三

四



石のり
 石のり
 石のり



御若命より門へ還如一人御草創ましく多佛縁の聖地なりと
 信長が暴威は懼れ退去はし終りぬ余りも本意を以て御
 乃や一應も再應し御辨退の門へ終るべしとんと席とて
 云とれと人をもすく宣ふは海軍の衆釋するまふは終る
 意地強き信長一旦中絶する義と釋退をいれはるる止べき
 といふべし忽ち軍勢とはむけ一討は尚寺と美濃さんと計
 せし老ある討は宗門の障りともり自他尚宗退終り及びる
 を用山守人積年の御若命もあとの泡と消えて我亦未
 地獄は強はるし我の唯信長が辱もよ但世退法して去地と
 与へ宗門不退終の計と肝要とこそ人々も終るふ下同刑終法
 眼頼廉同は角立上人の御終るなりなぐ某が不意にお違

仕る信長也く美素もくも何の思とくいりん加賀の御縁縁登の
 富山武は拙きふあり終るも御門下の首領は美依ら且藏といは
 けりや況やけ要旨は備終りて一人坐の御終といりんは國々の
 門後地集り佛縁信長をこそんす堂の内よりと席をおく罵
 たり上人終る終るをくせ終るある終はしの合我や富樫島は藏
 乙我が忠に欺く是上方り人を教し門下と死しぬ國郡とて何
 うせん還如上人若終り御堂と焼き再び山林は本寺といふ
 多は尚寺と建はし終はしは宗流日くは禁固て今も是も我徳は
 還如上人は及び終るも多は地國は多再び御堂と建はせは
 宗門より退終るべきは合我及び人々のははし御神と教
 へ押はる終るはくは欺き終るはるが考集りし門後の百姓

画本信長記初巻三
 画本信長記初巻三

皆一日よど門と後引一法大慈悲の御門を(難狀を中つけめくを
 御若勞うけむる信長の悪と囁付ても飽きくは降信長は
 ませはとも門後の面く一處し京都(送考)し佛款の爰先命
 を落さば成佛得達の縁なるべしいざや討く登らんといひ
 後より寺中大きに強きまよとやしくしりけし一庵の坊友
 老席とまよ百性をもめやうくよ庵せしめられ二人珍本
 派右勝門と進くるは先よりの後論終くとして一交せは教り
 足下の高論とぞん珍本を幸謹ぐやうなるまよにけ度
 一幸こそあま小門の真處よりまよ其信考ふ信長が不
 降退し終り附の深怒り軍勢を長向け合戦よ及んこと
 破く治定せり又二人と中退まよりく出石を信長よりへ

終りしは先よ合戦よ及んば(其故は信長が不降を悪と攻
 さんとろふ細三ツありり小回朝倉の両家の四き恨ありて
 多合戦よ及べり終る小出寺朝倉と因と倍び悲難お救へ
 のまよりあり先信長が悪二ツ之小回朝倉因及んば附加の
 朝倉よ力と助け小回方先がぬぬ及んば(事少くは先信
 が悪二ツ之信長生得英雄はして強きを悪と嘆るるを忌
 勢の若と妬も後るきと凌ぐけ故よ出京門の口海よ
 日く夜くは繫深るる信長又密よ是と妬り其上加州の
 系勢強く出附小回七州其守は本教寺の領とぬまより信
 長が出守と悪きこら乃第三なりまよ門く候本教寺へ
 軍勢と引て向ふをた志ありとらふもいまは勢力を得ざるが故

日本書紀卷之三十一



本願寺
後遊



一國と斬志所を龍乃池申をわさるがにけしけ時又係して本教寺
 を切崩日頃の勢懐と敷せんと欲もれども人の後論せんとを
 忍よく叶い難き不申とやうけ降退せば申す押させ美濃を
 若退敷けらば其体分たを討採せん信長が心深某とくか見
 鹿め申すう危よも角よも道はびた合戦とてとや人の面石山
 の要害は款を引うけ法款をばし降よばし河退去の体ゆらく
 御多うばねいと河とくく廣うたりと人々實りこやあらん
 懸御して居給ふも中間一家其外七里粟津が岨小躍して勇
 立給本氏の軍勢的出の如論けとの降派みそくは急ぎ信長
 不承知の返信近國遠國の門後と集め合戦の用意とばしとい
 めきつるは身を命と推志所の人出時降退の欲き返答は
 降よも信長急よ押よもつるのみぞくはを流り三好の一黨は
 困みひそまり怨款いまも滅せせは堪降よ荒本他田の強款
 丹波又波多押の一族ありいゑは依く本が餘黨降勢よ小
 島ありそが朝倉と北条武田をばしとに諸國の大款
 と何よお喜入の耐るる小信長何のや成りてう余の別款
 をお捨置き本教寺へ美濃へきたる信長一附の勢よ返を
 志く軍勢と知さんといふも小田家元来降略の長下ま
 流は浦止むじ先和く小押返答いてと人といはし門系
 の面く枕とるふし西三奉の心要く体と終てく返候の口とらとはど
 くよ中舎り人といはまを乞紀伊國へこそ降りたる殿如と人を

一國と斬志所を龍乃池申をわさるがにけしけ時又係して本教寺
 を切崩日頃の勢懐と敷せんと欲もれども人の後論せんとを
 忍よく叶い難き不申とやうけ降退せば申す押させ美濃を
 若退敷けらば其体分たを討採せん信長が心深某とくか見
 鹿め申すう危よも角よも道はびた合戦とてとや人の面石山
 の要害は款を引うけ法款をばし降よばし河退去の体ゆらく
 御多うばねいと河とくく廣うたりと人々實りこやあらん
 懸御して居給ふも中間一家其外七里粟津が岨小躍して勇
 立給本氏の軍勢的出の如論けとの降派みそくは急ぎ信長
 不承知の返信近國遠國の門後と集め合戦の用意とばしとい
 めきつるは身を命と推志所の人出時降退の欲き返答は
 降よも信長急よ押よもつるのみぞくはを流り三好の一黨は
 困みひそまり怨款いまも滅せせは堪降よ荒本他田の強款
 丹波又波多押の一族ありいゑは依く本が餘黨降勢よ小
 島ありそが朝倉と北条武田をばしとに諸國の大款
 と何よお喜入の耐るる小信長何のや成りてう余の別款
 をお捨置き本教寺へ美濃へきたる信長一附の勢よ返を
 志く軍勢と知さんといふも小田家元来降略の長下ま
 流は浦止むじ先和く小押返答いてと人といはし門系
 の面く枕とるふし西三奉の心要く体と終てく返候の口とらとはど
 くよ中舎り人といはまを乞紀伊國へこそ降りたる殿如と人を

方官家老より珍本が末弟に譲り「明智の孫も無後家より一役」諸
方乃門後よりいよいよまを揚いで合戦より及びつは其所の籠城
戦ひは信長に勝る小門後より委細長に已がまてくゆりたり

信長撰阿西園平均之幸

玄智小田と総女信長の末福寺に本陣をとらるは諸方の仕をき
むぐ下知せしとらる小教内の武士我りくく系止し名物名器と献
御上洛と笑し系より松永陣に久系より止し以より三好黨と不和を
あり信長の幕に奉りて陣系に在外系大津系良郷の阿人等
駈しく系向し本陣乃門外市と為し濃又信長の威風を近は時勢
せり附は石山本教寺より後者別速して濃と中々今度信長は
別軍家再真の御上洛ありせ終ひ悲歎退討の候りよ石山本

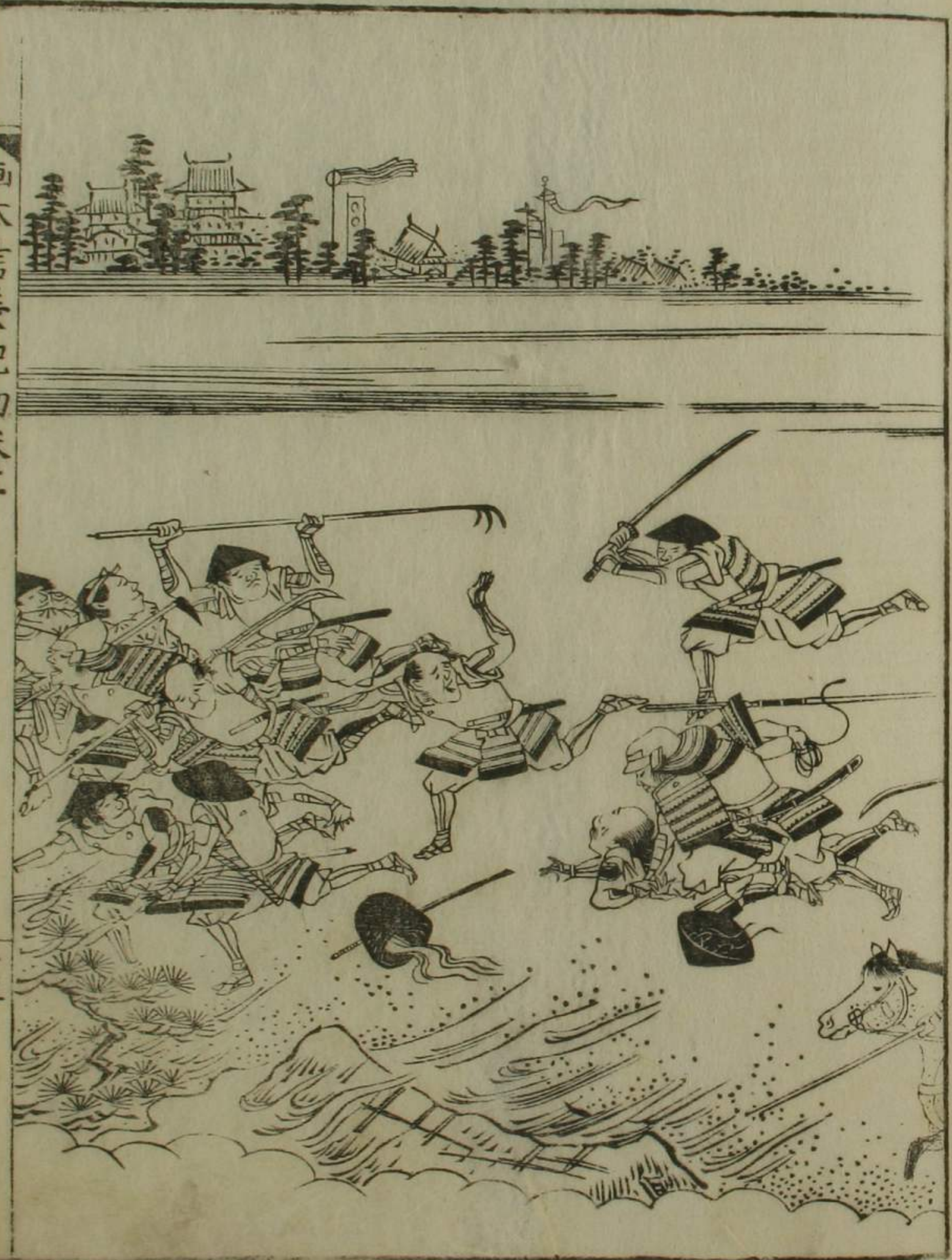
教寺の地は城郭と操き終るた地御市等の信武家の御中
いたる久き系御をよりとも我系門に抄ひくの中真蓮如上人望
徳を子の靈勅に依て用基ありし有縁の勝地にして先佐
ひをひて地邦(後)しひつる叶い難く嚴志忍入ていふもけ御御免
許と世あり意ひとの返言に信長はとて大さ小怒り憎き長坊を
わが中系よりたへ人望徳を子再速しく建立せし寺人より信長が石
屋せよ何系遠宵のあえきや況や違如くたの草振坊主が恩味の
道徳と仇くまのの靈應と世ありしなごめり末孫を命り建立し
本教寺より信長が屋に應じ退去をまじき系系懐を振へ
たやりのちが軍とんてえ困り火と敵て焼立ぬし坊主めり首を
洗くお侍ぬしと此の外の氣をうれば本教寺後者大さ小怒り



池田勝政
信長と
戦ふ

改を抱へ鼠のどく遊降りしけ時本下後者即承吉信長の御前
出流ありやつらの沖後立沖をよりいも出附に方の敵後いまで賊せ
比君真業の宝物より防至系とおむに兵と敵し終りんの詮るれり
まいつにや某密に悪業のめがけは天下に覇業をおさんと欲する
者ハ先氣とぬれは如登りては敵より討に謀略も能く不徳威威
も終りては軍令も正しく威威軍令謀略も三ツ終りては敵
を賊する者いまであはし今に海の内交れは兵革止む故諸國
の大名とく々々國宥せり其中に只一人ある者あり之と惟とら
るるはや彼本教寺如より君志がく怒りと相入本教寺と
わつはしく因より渠が令を悉くをて小田家の軍用は宛天下
と証し強敵と比し真業令き時と終り只一踏ふ本教寺を

ひきぎ渡さん何の子細ういべき先眼茶津國河内の敵後と終り
らと系都子安ろん御斗こそ肝要に候るゆり言とこと
と信長実よりとく其云系ははし本教寺と打とて是先
岩城を税女が籠るる善龍寺の城を夷落し次は摂州武庫郡
河内郡を放火し三好が族とも乃籠りたる城と退落し河内
國に在る屋敷森而城は三好が困日美岩籠り居たりと右方
戦叶ふはしとく城と捨くは國の方へ落ゆりけ時新云方義
昭も系都と出陣し終りはの赤林は沖陣を居らるる男山の方
より山魁教多とび来りて旗の上とるんは是足利家の志例
かりとくは軍陣に信感はしく終りはと終り沖陣ととる終り
信長の只万余騎の大軍と引陣し池田の城も池田籠後守勝改と

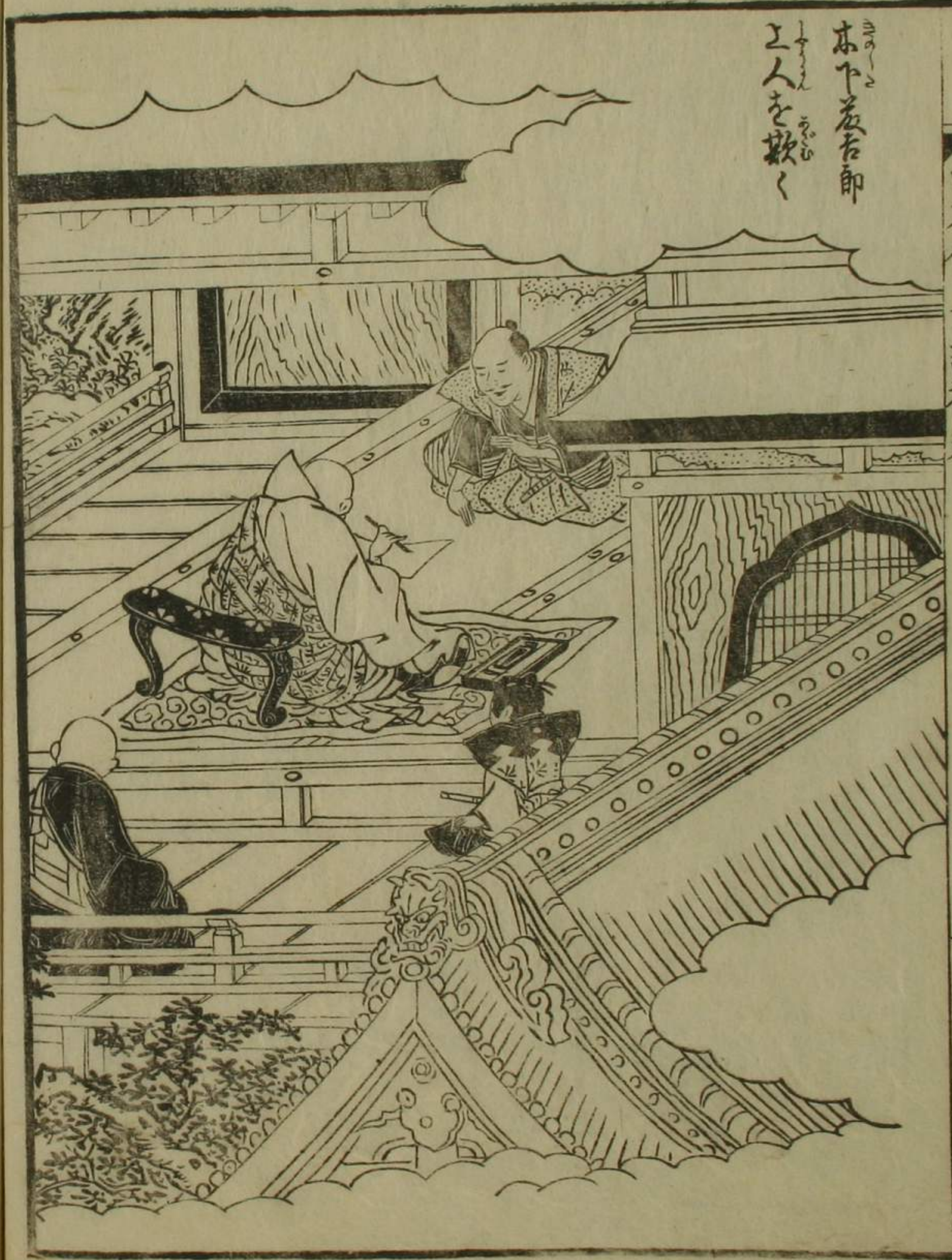


更らるは勝政大別かつまさの若わかりて外曲輪そとまがわへ切きて出信長でしんちやうが旗はたを握にぎり川平かわひら
 を房門ふやうもんを討うちた勇ゆうと震おどろく我われへども小田勢おだせい大軍たいぐんをいり事ことも
 せに終はる三さんの丸まるまど夷破やまぶらま入いり人質にんしちと出いりて降くだる外日國そとひくに
 二ふたつひくゑの柳やなぎの城しろ茨木いばの城しろ茨川いばがわ乃すなはち城しろ小津こつあの城しろとなりし
 津國つくに一國いっくにの郡村ぐんむらとなり信長しんちやう又また岐ぎに軍ぐんと守護しゆごして京都きやうと又
 降陣かふじんあらはけ同僚どうりやう又また二十にじゅう余あまり日ひたり城しろ又また小田家おだけの武威ぶいを近きん
 ぶらひ恐おそまじらしとしる者ものはし是こゝ又またすべしと信長しんちやうと後ご又また後ご下げ彈だん心しん忠ちゆう
 補かせられ新あらたお軍ぐんよりも二ふたつ引廻ひきまわり河旗かき又また感状かんとじやうを添そへしと揚たかふ
 信長しんちやう面目めんめいを融とけ又また畿内きないの仕し直ちやくともなり後ご本國ほんくに寺てらとお軍ぐんののり
 河平かへいに志し門もんらはい本下ほんげ後ご若わか郎らうと京都きやうと乃すなはち目代めだい又また涉せつしと諸しよの
 斗たう略りやく本ほん教きやう寺てらの兵へい斗たういはなしとし合あはれ信長しんちやうの永祿えいりく十じゅう一いち十じゅう

月廿八日京都を去り濃州岐阜又改城あり

本下秀の若軍用金借本教寺来

去後きご又また石山いしやま本教寺ほんきやうてらは信長しんちやうが怒いかり甚しんしく今いまり軍兵ぐんべい勢せいい
 来きらんと工人くわじんとなり下げの役人やくじん心こゝろも更さらに心こゝろをなりと密ひそに左ひだりの
 門かど後ごと集あり弓ゆみ又また鎧よろいとなりけ矢やの根ねと磨こと或あるは鉄炮てつぱうの符ふとなり
 揃そろとなり竹たけ本ほんを結ゆひ合戦あひせんの勇ゆうまじらしとなり信長しんちやう雷らい霆てい
 の鳴なりとりと掛州かけしゅう一國いっくにと二十にじゅう日ひ間かん又また平ひら治ちしと本教寺ほんきやうてらへいらしらし又また
 本國ほんくに兵べい隊たいへ降陣かふじんしとり本教寺ほんきやうてらの軍用ぐんよういはらし又またあらはしるとめ
 心こゝろ地ちをなりとりと是こゝ又またすべしと信長しんちやうをなりと明あ智ち先せん云いふの遠とほいとうとか
 威い祿りくしといふくと敵たかひとるとりと時とき又また同どう年ねん十二じふに月げつ朔しやく日本教寺ほんにほんきやうてら乃すなはち
 去國きこく又また来きりて案内あんないせる侍さむらいあり其面そのおもて後ごのとりと眼まなこ尖とがりとて牙かの長なが



本下屋右郎
工人を歎く

日本伝長言初巻三

十四

い又尺二幅ど顔醜々れども威風又昂若うく三十三余人の儀より
 を門前につせ執次とみてやろるゝ京都の守備代本や若吉即秀吉
 主人信長代系として今日後吉へ社系としてを序とみて推系はる
 上人拜偈と寛し終り本屋を更しと懇勸にお述べり九次の若心移る
 き扱ひの及びる様冠者とはけ男のりりや何やをりや中まあり
 いろろ強勅を引出し申うんと肩とをりりやと人へ志ろくと云こと
 を於て大廣間へ遣し入上人立物と対面られが秀吉恭く礼と終ひ
 激又先よりは信長出御が寺と本屋を及びぬ御許退の執き御宗
 向又扱ひくむの御名信長逆一は承知としては扱ひけと後信長心を
 又扱ひくむしも隔意としてとむりやと人より又御日云より信
 長が御座るるべき条某と以て足系に入いと濃で濃くろりやと人

き小教び終ひこの改りくる候をぬくひりのる信長別心申せりや小
 法師の身としていうそり宿老のりき只出寺は信長の威風を
 能し怒うは筋のものと恐怖しゆいしよ今の候とぬくけこの安
 堵やいとく御影の余り上人出雲よりて秀吉の酒とともく海
 の珍味肴様席は濃く御酒宴と備し終り何とがな強きよとく近
 習小姓よりくよ夢中しく僧馬樂と御人者より後系の御名と系
 つて是の御客として合と御座られたりは遊るもわり何と真に於
 りるも之短き日足西は傾けり秀吉をて憂を申さる再び上人より
 りるの今度義略と上洛よりく勢は御軍威と嗣終りともは秀吉
 主人母とせりや小に方の懇款とびざれが軍兵と扱おし頼末もよと
 終り日毎の軍用様しくあり不如意にけりせ終り信長御は是と

新米

お軍家
新米と秋



是よりとて自國の合戦は軍用足らぬ計はしむるに計略を考ひぬ人
足利家再貞乃倫を扱ひしむるに一臂の力を掛け用金と助勢あり
てお軍とにせしめあせ信長が歩ひ何のりう是より如く亦古今日の推
實のけをせしめあせ信長が歩ひ何のりう是より如く亦古今日の推
二人委細令兼ありて本寺退去の者こそ我度も辨退しやせ我
力の及びんがは助カヤトて納後二万貫則亦古と云次とて
款とあり納後より退くは納後とてはしむるは後へ亦古感涙を流
れて納後と人妻教多し祈せし人又慈と謝し京都へてよりり

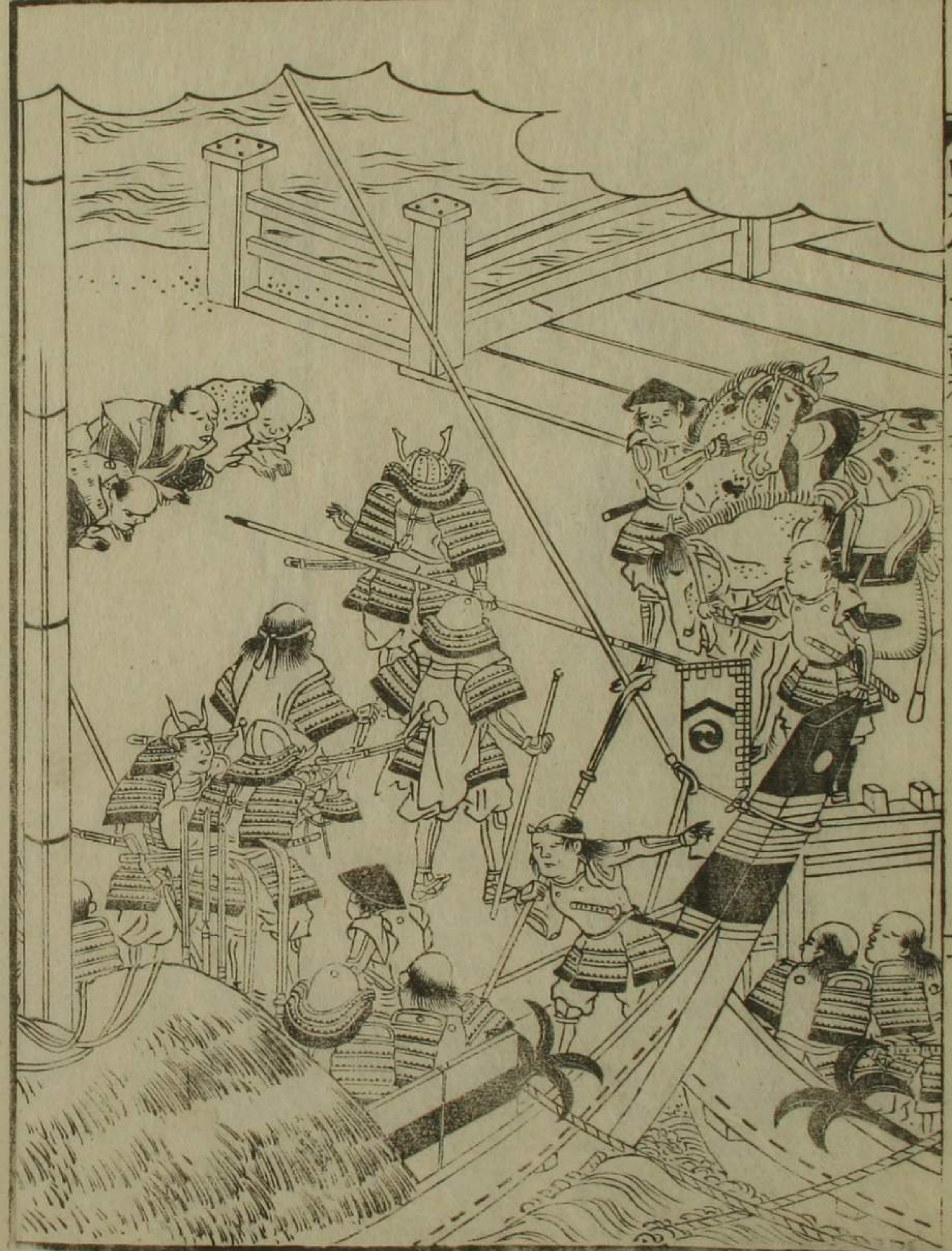
本國寺合戦之事

如く二人の信長が怒り解くと納後とてはしむるは後へ亦古感涙を流
れて納後と人妻教多し祈せし人又慈と謝し京都へてよりり

度く上納はしむるは後へ亦古感涙を流
れて納後と人妻教多し祈せし人又慈と謝し京都へてよりり



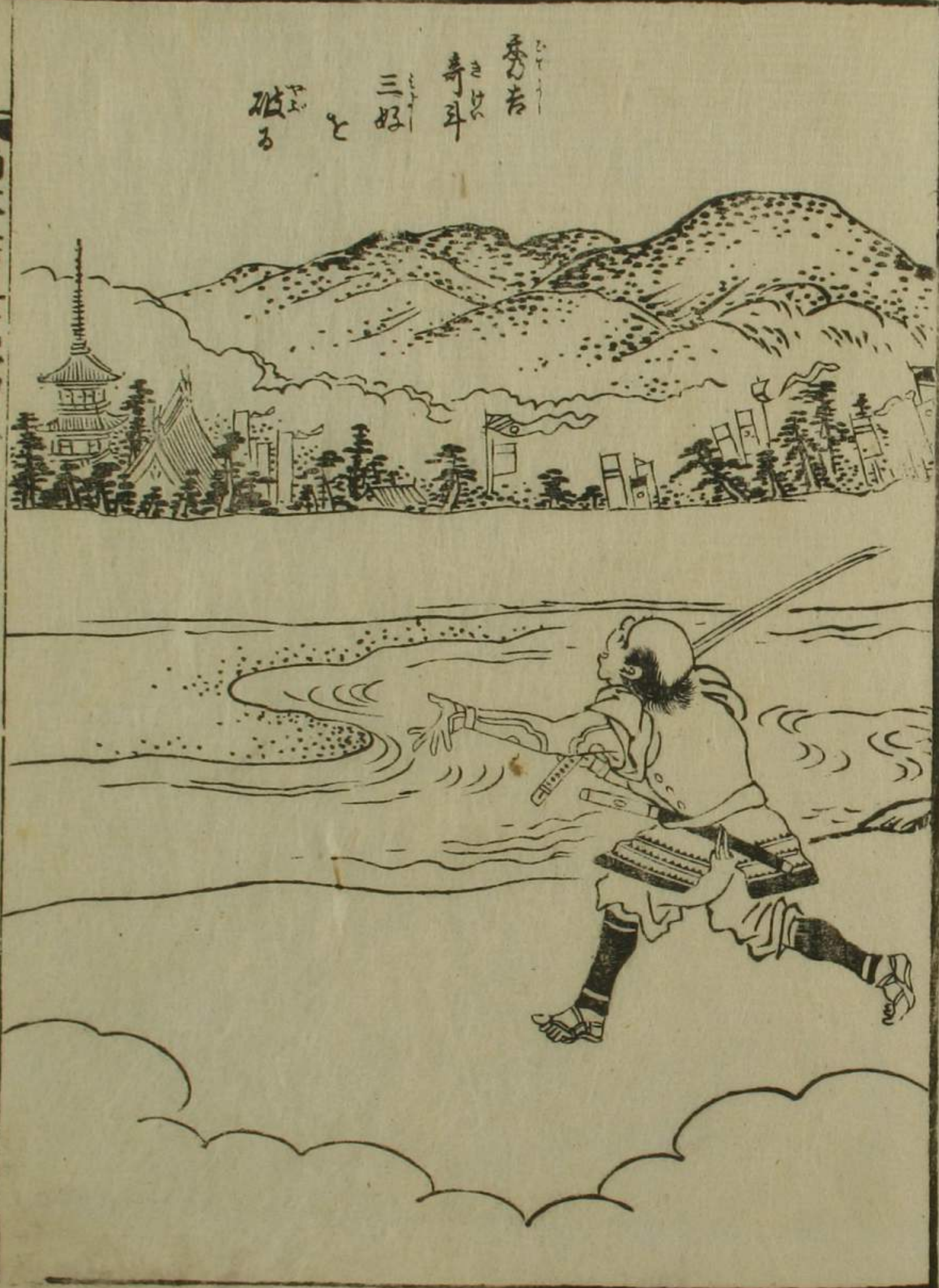
面下言長口ノ天



面下言長口ノ天

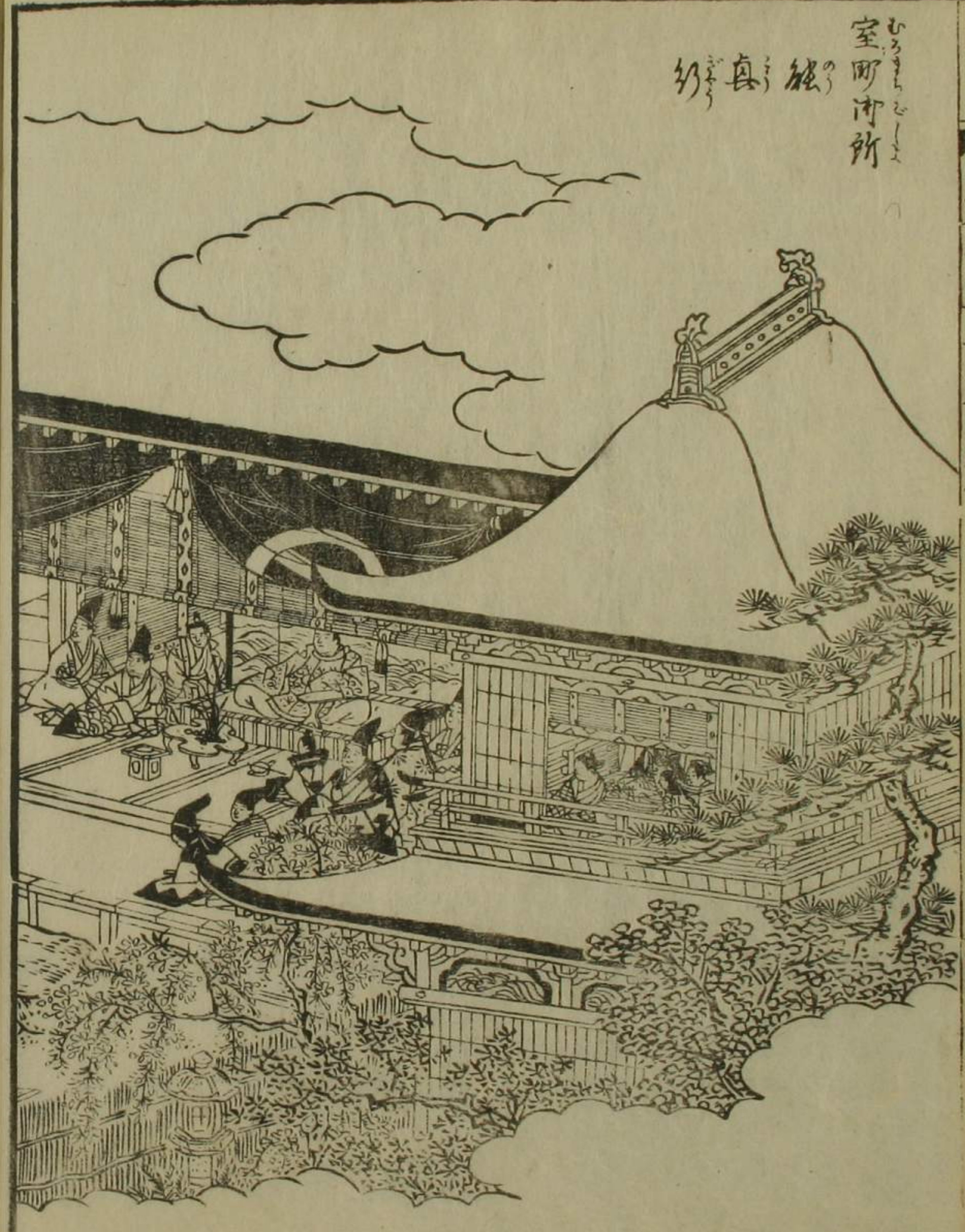
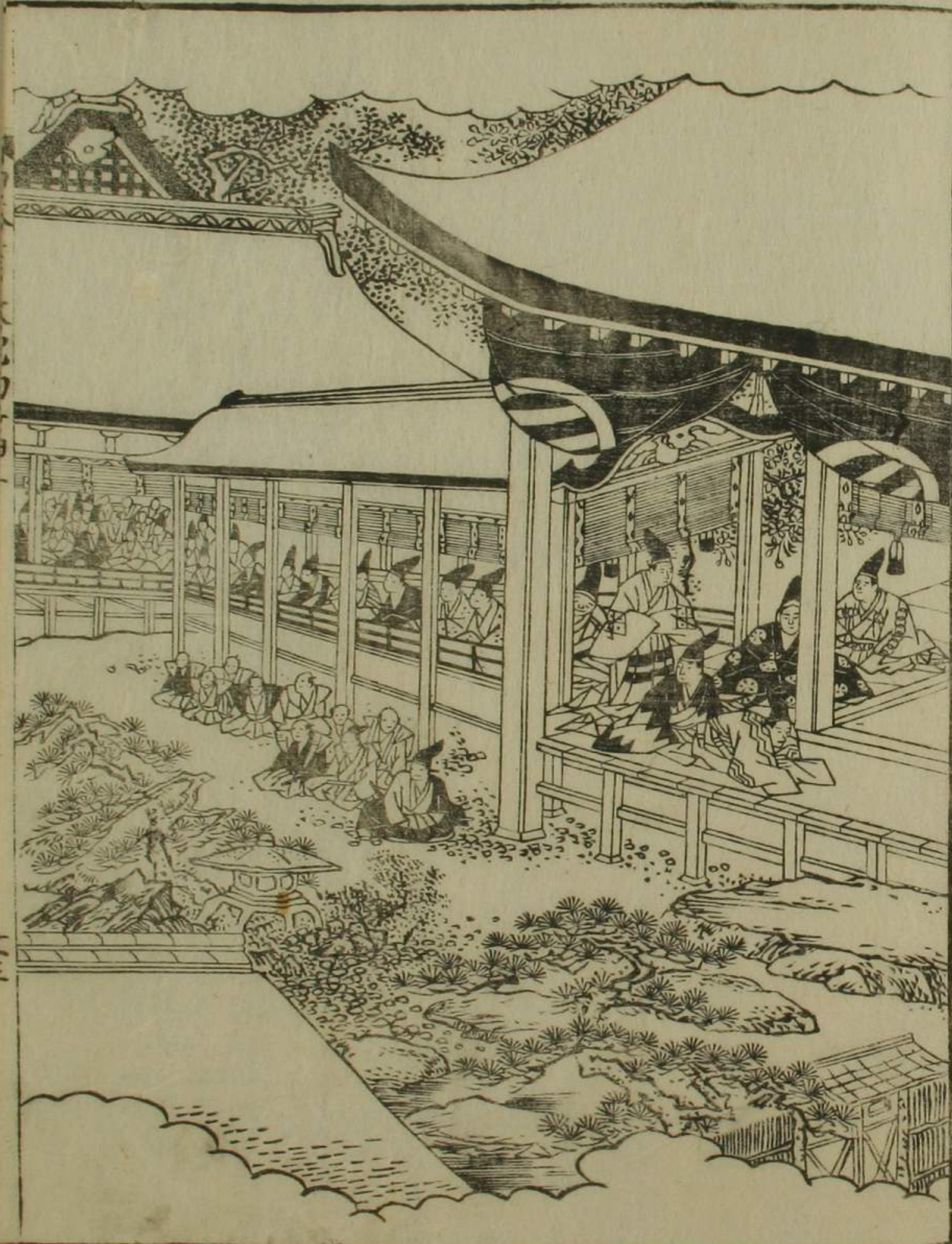
欵後を退治し己が勢ひ強まるる時不意に起つて本教寺と妻
 んと此是兵書と不謂欵なる所借く欵を滅亡保之汝降つて
 上人より人きいけ後用令調達河五用より也且後兵糧軍差乃
 用意あり信長が不意に妻りけいと河邊よりやさうに侵襲
 き急ぎ石山より退りあつくとやよれば上人は信すい疑ひた
 まへりも先手軍が云ふ系と降ひ是より用令と納をとら給ふ明と
 を承祿十二年正月二日に國の三好輝起を滅し堺の津より勢採
 し河内國を経て京都六条本國寺新お軍の押しまれ飯の所所へ
 押よせさんぐよこそ妻りたる本下及右即妻右是と歩と降しく
 紙旗數百流と造りさまぐの級相系を画せ七条九条より竹田
 街道の村へかちちる人百姓小令じて寺院のち被せ降を需め出

町きましく本國寺へ向く加勢のさまとあつる後三好勢俄より進
 ん得比附刻と移し於教内より河内國若江の城より三好義次降乃國
 丹の兵庫隊親貞池田は統後守勝政とはじめに近國乃大石お
 軍家の加勢としく退り馳来りて國の三好と勢のどく打崩し首を
 斬り八百余級終は三好勢土方より得比河内國へ逃去り信
 長は附波阜の城より押しつらかけ河を以て馳りき飛馬と鞭打京都へ
 馳よりつらふとる三好勢教じくお軍は何の恙もはしまさば信長
 弟向して退欵の飲いとせしうは寺院の要官なるき不の押もことと
 志こそ山後冬龍名ひもれとく二条勘解小治武備陣の焼つとみ
 石垣と築上げお軍の河不造營とこそとせしめらとる叔父信長京水
 の隈へと後とまられ居官宿老の若ともへ信長を去るお軍家河上

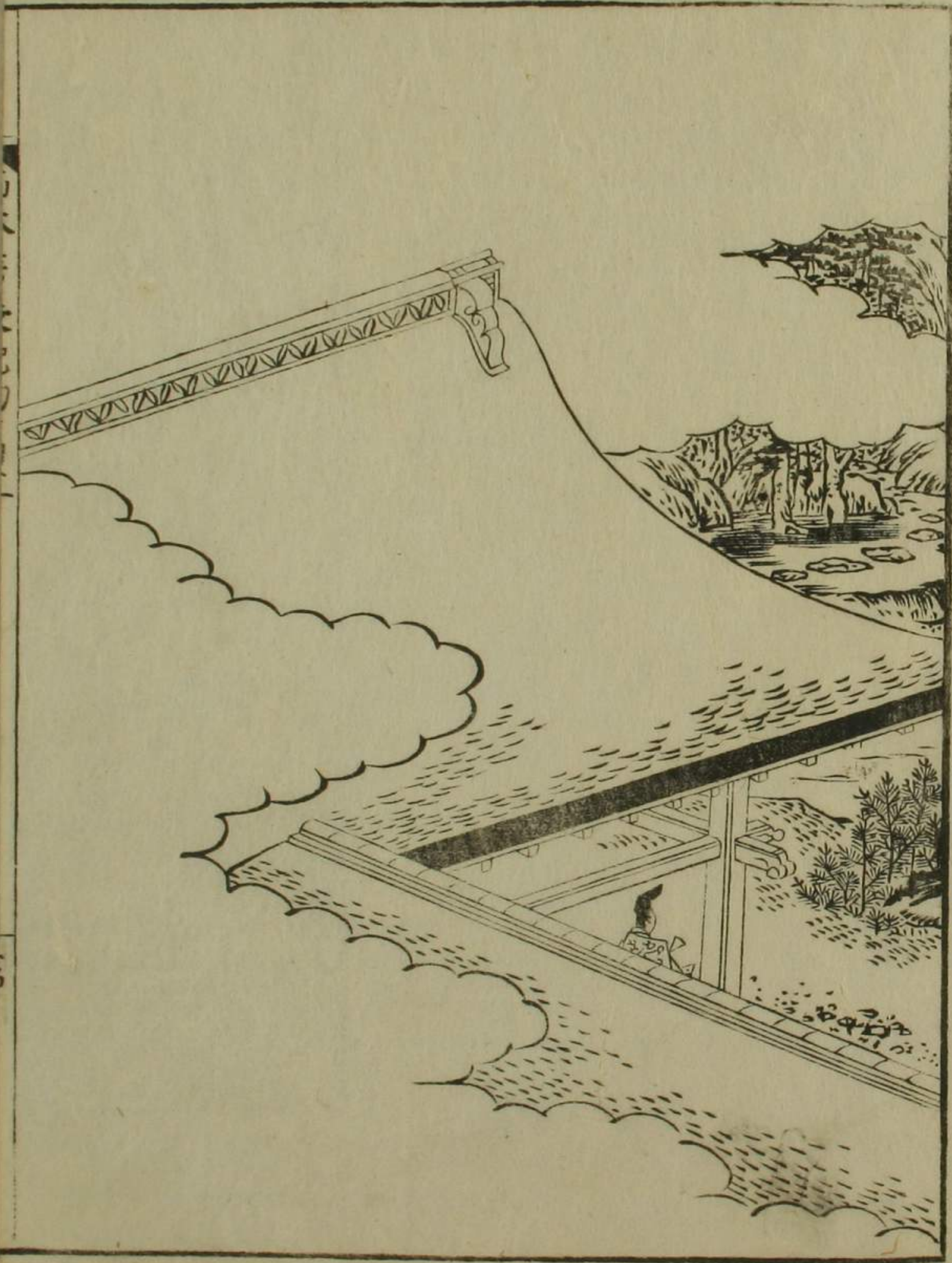


治はしまんは堰の町人河尻をせしめし今度三好は
 頼りし堰の津つて惣務をさせ合戦の調議を振へる軍家と
 せや系町人の分派して三好同士の逆徒いふくりて三好等
 一味とべき者なり堰の津の北面より火とけ男女老幼を
 一人も残さず斬殺せし又く京都へ兵より返着やと
 堰の町人と兵とと強勅信長の世に守へる荒瓦の
 憂目と見んも計りごとく老るる兵掛け切きと抱き
 敷り南の山とまよひ紀州泉州の海より兵と隠れ若
 寔は稀代乃強勅なり先よりの兵と相議し返着や
 河尻恐入れ裁く三好等小心とせ侍りたりと
 まく京都の統制殿に三好の衆中故止りるる
 要領をも取りて

こそ少町人共の養ふに何方一味侍りたりと何分
 免みそ堰の津と下されりぬとぞとぞと種々
 信長より侍出さるる強き兵隊が衆科死とのり
 兵軍河上治大敷のり侍られ死衆一と免と首代
 兵と金子又十両堰中より又いと納侍りしと
 兵と其後いふ侍りしと退きつるが流石大令
 かれは町人たつとと種々「教代侍侍りし名
 屋裏回留を令え換御し調議」又十両金と
 又治の如信長け又十両を河所造營の料と
 近は兵隊尾張丹後若狭等の人名を集め
 兵と小町多に月六日河所治大敷に
 兵軍河所移徒の儀式厳重



室町所
真能
切



其二



画本信長記初篇

初ハ終入^{とく}翌日^{あした}河^か祝^い儀^ぎの^の儀^ぎ真^ま外^{がわ}中^{ちゆう}信^{のぶ}長^{なが}出^い仕^しありて久^{ひさ}國^{くに}乃^の河^か
 左^{ひだり}方^{かた}と^と献^{けん}上^{じやう}の^のお^お軍^{ぐん}糾^{きり}る^るに^に献^{けん}ひ^ひ終^はひ^ひ自^{より}河^か祝^い儀^ぎを^を立^たせ^せ終^はひ^ひ信^{のぶ}
 長^{なが}又^{また}酒^{さけ}と^と場^ば入^い実^{まこと}よ^よ小^こ回^{わい}家^かの^の面^{めん}目^めう^うる^ると^と人^{ひと}く^くこ^これ^れと^とう^う中^{ちゆう}の^の日^ひき^き
 又^{また}月^{つき}十^{じゅう}一^{いち}日^{にち}信^{のぶ}長^{なが}河^かい^いと^とま^ま中^{ちゆう}國^{くに}波^な阜^ふへ^へ降^{くだ}城^{じやう}せ^せら^らる

繪本拾遺信長記初篇卷之三終

